

'71ひろしまの夏

黒い雨に打たれて

NO MORE HIROSHIMA./ NO MORE WAR./

「ヒロシマの夏」は、焦土から平和を呼びつづけてきた。だが、傷跡は、戦後26年経た今日なお、いえる事なく重くのじかかる。

あの時、小学校一年生だった少年が漫画家になった。中沢啓治（32歳）父と二人の妹弟は爆死。被爆者として生き抜いた母も五年前、原爆病院で死亡。彼は脳裏に焼きついて離れないあの瞬間を劇画の手法で一コマ一コマ描いていく。ペン先から描き出される被爆者の戦後史。それは自らの戦後史でもあったろうか。

ある時は、やくざに、娼婦に原爆二世のくつ屋の少年に、または、チンドン屋に身を落とした名トランベッターに名もなく貪しいこれら主人公は淋しく死に果てる。そして死にゆく主人公は、体験の重みを、平和の願いを、生ある者にたくす。それは中沢啓治自らの願いでもあるのだ。そうする事によって黒い雨を本当に終らせる事ができるのだという信念をもって。今、あたかも、彼の叫びに呼応するかのように党派をのりこえてヒロシマを自らの出発点として生きようとする若者達がいる。

自分で生きるぞ、自分の眼でみて自分の脳みそで考えるぞ他人の頭がい骨で、他人の生き方はしないぞ。俺自身が生きるために兵役は拒否する。 16歳 学生 三上久弥

戦争を知らない若者達は、今自分の足で歩きはじめめる。決して兵士にならないという誓いをたてて。

昭和28年生れ。戦争は知らない。だけど戦争を知らない事に誇りをもつ。できるなら一生、戦争なんて知りたくない。だから私は闘う。戦争になったらではなく、戦争をさせないために。戦争へと進むあらゆるものと私は闘う。

18歳 小堤めぐみ

彼等は自らの誓いを宣言するために広島へ向かう。反戦列車と名づけた夜汽車にのって。

私達の年代は戦争によって青春時代を暗いみじめな生活に明け暮れました。終戦の悲惨な目もいやという程味わいました。まだその記憶も生きしいのに、戦争の足音が聞こえています。反戦兵役拒否は私の命がけの願いです。二度と子供達を戦場へ送りません。 45歳 山中栄子

戦争を知らない若者達は手さぐりで摸索する。自らの運動を。

雨が降った事のない広島の八月六日。ドシャ降りの雨にうたれて記念式典は開かれた。戦後はじめてという一国の首相佐藤総理大臣を迎えて。反応は嵐のような騒ぎを招いた。

恒久平和のために努力を尽すと共に今なお、原爆の傷跡に苦しむ被爆者の方々のために福祉の増進を……。

佐藤首相は、顔をこわばらせて語った。

式典の静かな祈りの場を混乱させた被爆者青年同盟の若者達は、何を訴えたかったのか。そして、総理の目にどう映ったのだろうか。

365日いつでもいいんです。広島は待っています。広島を年とらせないで下さい。広島をみていって下さい。お骨で埋めつくされた広島を……

老婆は切々と語る。握手に透き肌のふれ合いを感じきって。

眼の手術をした後、どうも記憶がうすらいで考えがまとまらないで恐い。

また、戦争が起きるような気もするし……どうか平和な国を。

見えない眼で必死に何かをみつめようとする被爆患者。戦争の影か。平和の叫びか。

にんげんの にんげんのようにあるかぎり くずれぬへいわを へいわをかえせ……

たったひとつの言葉、平和。平和のために中沢啓治は描き続ける。原爆の証人として。

今、原水禁運動のシンボルとして華やかに脚光を浴びた第五福龍丸は、朽ち果て、沈んでしまった。

戦争で、原爆で死んだ人々の声なき声に応え得るか。我々は応え得るか。